

心所の定義における Abhidharmadīpa と

入阿毘達磨論の關係

吉 元 信 行

一

近年、有部阿毘達磨思想を理解する上において、経部的立場で述作されたとされる世親の阿毘達磨俱舍論に代わつて、その俱舍論を批判して、正統有部の立場を強く表明した衆賢の阿毘達磨順正理論が特に重要視されるようになった。この順正理論は、梵本・藏訳ともに欠け、漢訳のみしか現存せず、またその註釈も皆無である等の事情から、その文献学的研究にも大きな支障を来してきた。ところが、これと同じく、正統有部の立場で、俱舍論を批判せんとする Abhidharmadīpa の梵本が発見出版されてから、俱舍論梵本の出版とあわせて、この種の研究は大きな進展を見ることとなつた。

Abhidharmadīpa (以下 Dīpa と略す) は、俱舍論や順正理論と同じ様に、偈 (kārika) とその釈 (Vibhāṣa-prabhāvṛtti) から構成されており、特に釈の方では、順正理論の様に、俱

舍論や他の諸学派が積極的に批判されている。Dīpa は、藏・漢訳ともに欠け、梵本にもかなり欠損部分が認められ、全体は現存部分の約三倍になろうとされる。本論は、俱舍論を底本として、その俱舍論を批判せんとする順正理論と同じ様な目的で述作されており、学派批判という立場からすれば、Dīpa 全部が現存すればほぼ同じ位の分量をもつと思われる。Yasomitra の俱舍論疏に勝る思想的価値をもつものである。従つて、本論は、衆賢の順正理論等を中心とするカシミール系正統有部の学系に属することはほぼまちがいないと思われるが、その著者については未だ判明せず、またその成立年代についても、問題点が多々認められる。

この様な同題点を解決するには、Dīpa の解説と思想的解明と同時に、他の諸論書との綿密な比較研究が要求される。こういう観点から、先に有部系論書における極微俱生説を比較して、Dīpa がはつきりと俱舍論を批判して、更に大乘系

論書からの論難をも意識した上で、有部の正義を確立するため、順正理論をも超えて、Dīpa 独自の極微俱生説を打ち立てていることを確かめた。^②

このことを更にはつきりさせるため、他の諸論書との比較検討をするには、各論書にわたつて共通して説かれているテーマを選ばなければならない。その第一段階として、ニカーヤから南北両伝阿毘達磨、更には大乘諸論書に至るまで共通して詳しく論じられている心所の定義をとりあげることにした。その検討は現在も続けられており、未だその結論は出ず、従つて本稿はその過程において見出された一面についての報告である。^③

二

心所に関して、Dīpa とこれら諸論書と比較すると、先ず、心所の分類や名数については、明かに俱舍論や順正理論と同じである。ところで、十大地法について、俱舍論では「ここに伝説する (ime kila)」、十法はあらゆる心刹那に合してある」(Ak. p. 68) と説き、ime kila という語を使つて、世親は伝統説に対する不信の念を表明している。これに対して Dīpa では、「これら十法は、すべてのこれなる心すなわち地において、すなわち、三界に属するものと無漏なるものの中に合してある」(Ad. p. 68) と、順正理論と同じく、このこと

大 善 地 法										大 地 法										心 所 論 書
精進	不害	無瞋	無貪	愧	慚	捨	輕安	不放逸	信	定	勝解	作意	念	慧	觸	欲	想	思	受	
○	／			○	×	△	／	◎	○	△	×	×	×	△	△	△	×	×	△	Atthasālinī
×	○			○	△	×	×	△	△	○	×	×	△	○	×	×	×	◎	△	雜阿毘曇心論
◎	△			△ ⁽²⁾	×	△	△	◎	△	△	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	入阿毘達磨論 チベット
△	○			○ ⁽¹⁾	△	△	◎	△	△	△	△	△	△	○	△	△	△	◎	△	俱舍論梵本
×	△			△ ⁽²⁾	△	△	△	△	△	○	△	△	△	△	△	×	△	◎	○	順正理論
△	△			○	△	△	△	△	△	△	×	△	△	○	△			◎	△	阿毘達磨集論 梵
		[Dīpa にはつきりした定義を見出しえない。]																		備 考

◎ まつたぐ一致 △ 一部一致 × まつたぐ異なる ○ ほぼ類似 △ 一部類似

に何ら疑念をはさんでいない。このことは、Dipa が俱舍論でなく、順正理論と同じ学系にあることを示すものである。

ところが、各心所法の定義を他の諸論書と比較してみると、必ずしも順正理論に従っているとは認められず、むしろ他の論書に従っていると思われる面が多い。この様な比較検討の結果を主要論書に限って表にすれば前頁下段の表のようになる。尚、紙面の都合で心所は大地法と大善地法のみとりあげた。

三

この様な比較検討の結果、Dipa における心所の説き方は、その形式としては同じ学系に属する順正理論に従いながら、その定義の仕方はむしろ他の論書に従っている点のあること

が確かめられた。心所の定義は各経論にわたって必ずしも同じではない。ニカーヤから論書への発展段階を通じて変遷が見られ、また南伝北伝や学系などによつても相異が認められる。従つて、学系・著者・成立年代などについて種々問題点の認められる Dipa における心所の定義を厳密に検討することによつて、少しでもこれらの問題点を解くことは可能であろう。ところで、この中でも、Dipa と入阿毘達磨論の間には著しい一致関係が認められる。特に十大地法では十心中九心所が何らかの形で一致し、中でも、七心所は引用と断定せざるを得ない程の一致関係を見る。その実例として、Dipa と入阿毘達磨論の蔵訳を比較してみると次の様になる。ここでは大地法と大善地法の中で特に一致する点の多い十心所のみをとりあげた。

Abhidharmadīpa-vibhāṣāprabhāvṛtti	Abhidharmāvatāra-sāstra (Tibetan tr.)
(1) [vedanā] <i>tatra vedanā sukhī adis tri-vidho 'nubhavaḥ tri-vi- dhav saṃvutitam iti paryāyāḥ, iṣṭāṃśobhaya-vipar- ita-visayēndriya-vijñāna-samnipātājā dharmayonih ka- ya-cittāvasthā-viśeṣaḥ, prahādya-upatāpi tad-ubhaya- vipartitāś ca trīṇa-hetur vedanēti ucyate </i>	(1) <i>tshor ba ni myan ba rnam pa gsum ste bde ba dan sṅag bñal ba bañ bde ba yañ ma yin sṅag bñal ba yañ ma yin pa ste/ gsum tshor bar gyur pañi dan gañ yin pañol/ hḍod pa dan mi hḍod pa dan gñig las bzlog pa ste rig pañi skye gñas can lus dan sems kyi gñas skabs kye bye brag sim pa dan gñig las bzlog pa ste/ sṛid pañi rgyu ni tshor ba shes byañol/</i>

- (2) [saṃjñā]
nimitta-nāmaṁrthāikyā-jñā saṃjñā vitarkeyoniḥ/
- (3) [cetanā]
cittābhisamskāraś cetanā/
- (4) [smṛti]
citta-vyāpārā-rūpā smṛtiḥ/ cittasyātrthābhilāpana
kṛta-kartavya-kriyamāna-karmanātrivīpramoṣa-
lakṣaṇāḥ/
- (5) [cchanda]
cchandaḥ kartu-kamata vīryāṅga-bhātaḥ/
- (6) [sparsā]
viśayendriya-vijñāna-sannipātaḥ/ cittasya viśaya-
spṛṣṭiḥ, caitasika-dharma jīvana-lakṣaṇaḥ sparśaḥ/
- (7) [ādhimokṣa]
cittasya viśaye 'dhimuktiṁ ādhimokṣo ruci-dvītiya-
nāma cittasya viśayāpraitisaṃkoca-lakṣaṇaḥ/
- (8) [manaskāra]
cittasy' abhogo manaskāraḥ parvānubhāt' ādi-
samanvāhara-svarūpaḥ/
- (9) [śraddhā]
tatra śraddhā cetasaḥ prasādo guṇi-guṇātrihvābhi-
sambhṛatyay' ākāraḥ, citta-kāluṣyāpandyaḥ/ tad yathā-

- (2) *mtshan ma dan mid dan don gcig tu ces paḥi chos*
gañ yin pa de ni rnam par rtog paḥi rgyu ste ḥdu ces
she byaḥo/
- (3) *de la sems pa ni sems miñon par ḥdu byed pa kyī*
las sem kun tu gyohi shes bya baḥi don gañ yin pa-
ḥo/
- (4) *dran pa ni sems kyī miñon par bñod pa ñid de/*
byas pa dan/ bya ba dan byed paḥi las ma bñed ces
bya baḥi tha chig go/
- (5) *bdun pa ni pyed ḥdod paḥi brtson kyī yan lag tu*
gyur pa stel/
- (6) *reg pa ni yul dan dñan po dan rnam par ces pa*
las byuñ baḥi sems yul la reg par byed pa ste sems
las byuñ baḥi chos ḥisho bar byed paḥi mtshan nid do
- (7) *mos pa ni sems yul rnam las smos pa ste yul ma*
shun pa shes bya baḥi don gañ yin paḥo/
- (8) *yid la byed pa ni sems kyī ḥñug pa gañ sems yul*
rnam la gdod pa stel/ snon myoñ ba la sogs pa sems
pa shes bya baḥi don gañ yin paḥo/
- (9) *dad pa ni sems dan ba ste ḍkon mchog gsum dan*
rgyu dan ḥbrel pa la mñon par yid ches paḥi rnam
pa sems kyī rñog pa sel bar byed paḥi chos sten te/

*daka-prasadako manih sarasi prakshipah sarvam kal-
nuyam apantya cchatam utpadyati tadvac citta-
sarasi jatah śraddha-manir ih/*

(10) [vīrya]

*viryaṃ kuśalakuśala-dharmotpāda-nirodhābhyutsa-
hah, saṃsāra-nimagnasya cetaso 'bhyumnatir ity
arthah/*

(Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāṛī by P. S. Jains, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Patna, 1959, pp. 69~71)

*dper na chud dan bar byed bahi nor bu mshohi
nain du bcug na/ rdza ba kyi rñog pa thams cad bsal
nas chu gsal bar byed pa de bshin tu/ dad bahi nor
bu sems kyi mtsho las byun bas kyan sems kyi rñog
pa thams cad bsal nas……*

(10) *brtson hbrus ni dge ba dan mi dge bahi chos sked
pa dan h'gog par spro ba stel h'gor bahi h'jam du
byin bahi sems mñon par h'byun bahi don gan yin pa ho/*

(The Tibetan Tri-pitaka, Peking Edition, Otani,
Vol. 119, pp. 44-45)

四

両資料のイタリック部分が一致するところ、または原語は異なるがほぼ同じことを言っていると思われるところである。勿論、心所の定義における関係は他の諸論書にも認められるが、それは一部の一致にとどまり、これほどの一致関係は俱舍論と言えども見られない。少なくとも、ここに実例としてあげた心所に関しては、Dīpaの著者が入阿毘達磨論を引用したとしても過言ではなからう。このことは、Dīpaと入阿毘達磨論との間に直接の関係があることを示すものである。

この様なDīpaと入阿毘達磨論との教系上の関連性については、かつて示唆されたこともある⁽⁹⁾。それはDīpaに「八句義 (astau padārthah) すなわち五有為と三無為はすでに説かれた」(Ad. p. 4) と入阿毘達磨論のみに出る「八句義」という語についての言及があることによる。心所の定義における両論の一致関係はこの示唆を更にはつきりさせるものである。

また、入阿毘達磨論の帰敬頌第三頌には次の様に説かれて

いるが、これは Abhidhamadipa という書名の素材になつたのではないかということを推測させるに充分であらう。

「慧の劣つた者による妄説による闇に蔽われた牟尼の言葉が、その燈明 (sgon ma, dipa) によつて明かにされるかの燈明を作る者に敬礼する。」(Tib. 119, p. 43-4)

その註釈 *Sārasanucaya* によると「燈明とは阿毘達磨論を意味する、諸諦がこれによつて明示されるから」(Tib. 119 p. 123) と説明されるのである。

これらのことからして、Dipa の述作者は、入阿毘達磨論を単に座右に置いていただけではなく、積極的に引用取意し、また思想的にも大きな影響を受けたと見るべきであらう。

入阿毘達磨論は、梵本欠け、藏・漢訳としてのみ現存し、有部系論書に属するが、八句義を以て組織され、形式は俱舍論や順正理論と異なり、むしろ阿毘達磨集論や大乘五蘊論等の大乘系論書の説相に近いという特異な論書である。従つて、著者・成立年代・学系とも未だ疑問点が多いが、一応、西域記や光記等によつて、衆賢の師、塞建地羅 (Skandhira) 論師の作とされている。そうすれば、Dipa は明かに衆賢の流れをくむものであるから、Dipa の著者が衆賢の師の著作とされる入阿毘達磨論を参照したということは考えられることである。

その様などころから、Jaini は、Dipa の著者を、西域記の

中で衆賢の末弟の一人であると説かれる毗末羅密多羅 (Vimalamitra) であると推測するのであらう。⁷⁾ しかし、西域記のこの部分には Vimalamitra が Dipa を述作したとの記述はない。また、今まで検討した極微俱生説や心所の定義からしても Dipa が全面的にそのまま順正理論を継承しているとは言いがたい。その意味でも Dipa の著者が衆賢の直弟子とするのは再考を要するであらう。

ところで Vimalamitra が衆賢の弟子であるというだけで Dipa の著者であるとの推測が許されるならば、同じ大唐西域記に

商_一莫_一迦_一菩_一薩_一被_レ害_一東南行_一三百余里_一至_二跋_一虜_一沙_一城_一北有_二宰_一堵_一波_一是_二蘇_一達_一拏_一太_一子_一^{唐言_二善牙_一}以_二父_一王大_一象_一施_二婆_一羅_一門_一蒙_レ謹_一被_レ預_一顧_一謝_一国人_一既_二出_一郭_一門_一於_レ此_一告_レ別_一其_二側_一伽_一藍_一五十_一余_一僧_一立_二小_一乘_一学_一也_一昔_二伊_一濕_一伐_一邏_一^{唐言_二自在_一}論_一師_一於_レ此_一製_二阿_一毘_一達_一磨_一明_一燈_一論_一。(大・51・八八b)

と記述される「伊濕伐邏 (Isvara) 論師」であるとすると推測も成立しうるであらう。前述した入阿毘達磨論帰敬頌における「燈明 (dipa)」に相当する漢訳では「明燈」(大・28・九八〇c) と訳されていることから、この西域記における「阿毘達磨明燈論」は Abhidhamadipa のことではなからうか。

Isvara 論師についてははつきりしないが、玄奘が「昔」と記しているから少なくとも世親以後西紀六〇〇年頃の間で

あろうしまた、跋虜沙城はガンダーラでもカシミール寄りの地域であると推測されるから、世親や衆賢の活躍した時代や地域に近いと思われる、年代的、地域的疑点は認められない。しかし、学派批判という観点から見て、Dīpa 成立をもつと後の西紀八五〇年頃まで引き下げる説もあるし、これらのことに言及するには更に多くの資料と紙数を要するので、別の機会に論究することにして、ここでは問題提起のみにとどめたい。

- 1 Dīpa に関する紹介や研究としては、本論唯一の校定本である P. S. Jaini (ed.): *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhā-vṛtti*, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Patna, 1959
- ② Introduction の他次の様なものがある。

① 桜部建「新刊紹介 *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhā-vṛtti*」大谷学報・四一巻二号・大谷学会・京都・昭三六年・九四～九六頁。

② G. H. Sasaki: Review “*Abhidharmadīpa, with Vibhāṣāprabhā-vṛtti*”, Bulletin of the School of Oriental and African Studies XXV: part 2, University of London, 1962, pp. 373～375.

③ 桜部建「アビタルマのともじび(第五章第一節)」大谷学報第四十三巻四号・第四十四巻一号・大谷学会・昭三九・四〇年

④ 佐々木現順(著)「阿毘達磨順正理論」東本願寺・京都・昭四四年。

⑤ 広瀬智一「有部論史上における *Abhidharmadīpa* について」曹洞宗研究員研究生研究紀要・第一号(曹洞宗宗務庁・昭四

心所の定義における *Abhidharmadīpa* と入阿毘達磨論の関係(吉元)

四年) pp. 55～50

⑥ 広瀬智一「阿毘達磨灯論釈における仏教學派批判」右掲誌第三号(昭和四十六年) pp. 142～126.

⑦ 拙稿「*Abhidharmadīpa* における極微俱生説」大谷学報第五巻二号(大谷学会・昭四六年)九一～九五頁。

2 拙稿「有部の八事俱生説」印度学仏教学研究、第二〇巻一号(昭四六年十二月)三三一～三三五頁。

3 比較検討に当つて参見した資料の中で主たるものは次のものである。

- (1) *Pāli Nikāya* (PTS)° (2) 阿含経(大・1・2)°
 - (3) *Athasālinī* (BOS)° (4) *Visuddhimagga* (PTS, HOS)°
 - (5) 雜阿毘曇心論(大・28)°
 - (6) 入阿毘達磨論(大・28)° 同 藏訳(影印119)°
 - (7) *Abhidharmakośabhāṣya* (Pradhan ed.)° 同 藏訳(影印115)° 阿毘達磨俱舍論(冠導)°
 - (8) *Yāsomitra: Abhidharmakośavyākhyā* (Wogihara ed.)° 同 藏訳(影印・116)°
 - (9) 阿毘達磨順正理論° 顯宗論(大・29)°
 - (10) *Abhidharmasaṃuccaya* (Pradhan ed.)° 同 藏訳(影印112)° 大乘阿毘達磨集論(大・31)°
 - (11) *Abhidharmasaṃuccayabhāṣya* 藏訳(影印113)° 大乘阿毘達磨雜集論(大・31)°
 - (12) *Sūtramatī: Triniśikā* (S. Lévi ed.)°
- この作業に当つては、水野弘元「パーリ仏教を中心とした仏教の心識論」(山喜房・東京・昭三九年)第四章を参照した。

心所の定義における Abhibharnadipa と入阿毘達磨論の關係 (吉元)

三五四

4 世親の説は、大乘五蘊論に説く如く、欲・勝解・念・三摩地・慧の五を五別境の心所として、一切時一切心に俱生しないとしたようである。(cf. Akv. p. 127)

5 桜部建「新刊紹介 Abhidharmadipa with Vibhāṣa-prabhā-vṛtti」大谷学報第四一・二号九五頁。

6 桜部建「入阿毘達磨論の研究」大谷大学研究年報 No. 18、一九六五年、一六五～一六九頁、参照。

7 Abhidharmadipa, introduction pp. 131～134. 大唐西域記卷四(大・51 八九一～九)。

8 西域記の東西の各翻訳書を始め、最近刊行された、水谷真成訳「大唐西域記」中国古典文学大系22(平凡社・昭46)九四頁にも現存藏経中に見当らないとされている。

(昭和四十六年度文部省科学研究費、奨励研究(A)による研究成果の一部)

寄稿されなかった諸氏の発表題目(八)

善導大師における戒の意義

三枝樹隆善

梁武帝の捨身について

水尾 現誠

凝然の浄土教観

源 弘元

正法眼蔵の表現について

峰岸 孝哉

ウルヴェーラー神変の伝承形態

宮坂 有勝

バーミヤンにおける涅槃図の新資料紹介

宮治 昭

介

中国南北朝における彌勒信仰の一側面

三輪 晴雄

親鸞聖人における人間論

森 祐昭

地球の自転について—インド科学史の一側面—

矢野 道雄

一側面—

智識優婆塞貢進について

吉田 清

論母の発展について

渡辺文磨呂